OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	<書評>水谷由美子著『毛利臣男の劇的空間舞台・ファッション・アート』
Author(s)	森田, 雅子
Citation	デザイン理論. 2007, 50, p. 196-197
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53162
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

水谷由美子著
『毛利臣男の劇的空間 ── 舞台・ファッション・アート ──』

繊研新聞社　2006年11月12日　207ページ

森田雅子／武庫川女子大学

毛利臣男というデザイナーに20年来熱い詮索のまなざしを向け，熱烈なファンとして過去に遡って作品表象を追跡・解説したものが水谷由美子氏の『劇的空間』である。この種のルポルタージュにありがちな臨場感の欠如というものを多数のインタビューを交えてまめまめしく補っているのも非常に喜ばしい。出版に寄せた毛利の文章，そして好事家にとって有り難い数多くの「参考文献・資料」，取材協力先が精力的な取材ぶりを生き生きと物語っている。

毛利は『現代日本人名鑑』〔2002〕に依れば，「衣装デザイナー　空間デザイナー　アーティスト」ということになる。1973年三宅一生デザイン事務所に入所以降主に事務所のＡＤとして活躍したが，三宅一生の紹介で携わったベジャールのバレーの衣装デザインを皮切りに，市川猿之助の『スーパー歌舞伎』シリーズ，映画『西太后』などの美術・衣装デザインをてがけ，さらに「世界陸上競技選手権大会開会式」「モードのジャポニズム」などの芸術監督をつとめた。

さて，水谷の著書の背景にある大きなテーマは〈ジャポネスクの衝撃〉である。森英恵，KENZO，三宅一生，Comme des garçons，山本耀司のデザインが欧米発信型のファッション界にもたらしたジャポネスクの一大潮流は，〈きもの〉〈プリーツ〉〈文様〉〈色彩〉〈アシメトリー〉〈デコンストラクション〉他多数のキーワードにキメラ的に解体することだけではもちろん説明できない，複合的な文化現象である。その中で毛利臣男の多数のメディアと領域に亘る貢献は見逃せない。

以下に非常に僭越ではあるが，著書の内容を極簡単に紹介する。

まず水谷は「オマージュ」で毛利の業績をバレー・リュッスのレオン・バクストの与えた衝撃に準(なぞら)える。オペラ，バレエ，スーパー歌舞伎，現代劇，アートとファッション，コラボレーションなどの数々の事例を示して，毛利の多彩な作品歴をわかりやすく解説してくれる。また，優れた審美眼で口絵を掲載して，我々の理解を深めてくれる。

毛利は180センチを超える長身という恵まれた身体表現能力者であり，舞踊の修練を重ねるうちに三宅一生との出会いがあったという。やがて三宅一生の〈弟子〉の一人として彼のファッションショーや展示などの演出に深く関わり，また三宅一生を通じてモーリス・ベジャールとの共同作業にも展開していく。デザイナーとしては異色の経路を辿る毛利であるが，猿之助とのコラボレーションに至っては，不世出のスーパー歌舞伎「ヤマトタケル」の衣裳制作で面目躍如の活躍を見せ，そして全世界を「感動の渦」にまきこんだ。

水谷によればこのような活動は彼の空間構成能力をさらに開化させ，「舞台装置領域に深く食い込む衣裳デザイン」を発表していく。三宅一生との共同作業の記述は続く。まず，ファッションというジャンルの権威を高め，「ファッションがアートと見なされる地平を切り開く」新境地を開拓した。さらに「ファッション＆ビデオ・パーフォーマンスの創造」，「ファッション・インスタレーションの創造」，「コラボレーション美学」，「色彩の力と衣裳の装置的表現」などのタイトルを冠したそれ

ぞれのくだりで毛利たちの活動を主に表象面から解説する。つまり，「91年湾岸戦争時」のパリコレの危機的状況にもかかわらずショー開催にこぎつけるなど，ジャポネスクが他ジャンルと対等以上にカリスマを発揮するということに腐心しただけではない。むしろ，ここで，水谷はファッション〈服飾表現〉という人間の天職が他分野を侵食して果敢に切り込んでいく過程での毛利らの俊敏な戦略について語りたかったのではないかと思う。

毛利臣男の業績全体を通観する著書が上梓されるのは今回がはじめてであるが，インターネット上ではすでに多数の関連サイトが検索できる。たとえば1997年から青山スパイラルガーデンで行った毛利の一連の展示に関連して運営されたサイトが「モーリの色彩空間」である。2006年その事業は完結したという。サイト「モーリの色彩空間」が役割を終え，新たに「モーリのクリエイションクラブ」が開設されるということについての「ごあいさつ」を披露しておく。〔「モーリの色彩空間実行委員会」 2007／03／19　http://www.creation-club.jp/；MOHRI ROOM 2007／03／19　http://www.creation-club.jp/〕。毛利にとっては一つの時代が終ったのであろうか。

「年齢・性別・経歴・国籍・有名無名に関係なく，イキイキと輝いている素晴らしいクリエイターに空間演出家の毛利臣男が考える「祭」空間に参加してもらおうというプロジェクト。単なる自己表現という枠を超えて時間と空間をも包括する。20世紀から21世紀を繋ぐクリエイションの橋『モーリの色彩空間』は2006年に完成しました。」

2005年4月から京都造形芸術大学芸術劇場春秋座の芸術監督に就任して，『ヤマトタケル』再演，『猿之助の世界　第二章〈猿之助歌舞伎とジャポニズム〉』『猿之助の世界　第三章〈市川猿之助とオペラ〉』等のトーク＆ライブショーにおいて毛利と市川猿之助の教育分野におけ新しい取り組みも続行する。これらの企画はモードのジャポニズムの余韻に耳を鋭くとぎ澄ますものにとっては絶好の機会であろう。

惜しむらくは，水谷の解説が，毛利臣男という一人の存在，デザイナーの受け持つ分野ではどちらかというと表象的な部分の描写に留まったかにみえるということである。つまり，多文化，多メディアを駆使した毛利の輝かしい造形的な手法やボキャブラリーの集積の位置付けはどうなのか，または彼がジャポネスクの代表選手の一人として持つ意味は何なのか。視覚的衝撃を与えるアート性ということと，ファッション性はどのように矛盾するのか，しないのか。そしてその衝撃の引き起こす〈たゆたい〉の事態は最終的にどのように新しい重心をもとめ，たどりついた踊り場から，どのように次の振りへと移行すると考えるのか。次回の著書では水谷の見解をもっと詳しく明かせてもらえる気がする。